

国語教育

山田 文美

本稿では、2021年の国語科教育分野の動向について報告する。

全国大学国語教育学会編集の『国語科教育』第89集では、河上裕太「学習者の『解離』が示す文学教育の課題と可能性」が研究論文として掲載され、文学教材に関する教室の読みと自分自身の読みとが解離する現象及びその構造について論究している。その解離を課題であり可能性でもあるとしているところに特徴がある。また、萩中奈穂美の実践論文「『語彙学習力』育成のための実践的研究—表現学習における語彙指導の意義と方法—」では、人物像を伝える文章を書く学習における語彙の「マップ」づくりの活動を提示している。この活動は具体的な表現対象と照らした語彙の体系化に有効であり、「語彙学習力」を高めることに繋がったとの成果がまとめられている。

『国語科教育』第90集では、春季大会(第140回 オンライン大会)のシンポジウム「古典の学びを国語科教育学はどのように捉えるのか」(コーディネーター：内藤一志・菊野雅之、提案者：藤森裕治・難波博孝・前田雅之・三上英司)の報告がなされている。素材としての古典の現代的価値について多面的に検討がなされ、古典研究と国語教育研究の架橋の必要性についても言及されている。

解釈学会編集の『解釈』5・6月号(特集 国語教育)では、作文指導に関する論文が2編掲載されている。松崎史周「児童・生徒作文における条件表現の出現状況—『手』を題材にした作文の場合—」では、「と」「ば」「たら」「なら」の4形式の条件表現に着目し、児童・生徒の「手」作文の分析を行っている。これをもとに論理的文章表現力の育成について考察し、「読むこと」と「書くこと」との関連や思考との関わりについても言及している。王培「写真を教材とした作文指導の試み—看図作文を取り入れた実践に即して—」では、中国の伝統的な作文の指導法「看図作文」をもとに、大学生を対象にした看図作文の授業実践の報告がなされている。「看図作文」とは、絵図を読解し、読解した内容を文章によって表現するものである。この活動は学習者の表現意欲を喚起する効果があり、特に「対比性」を持つ写真を使うことでの有効性が示唆されたとしている。

日本国語教育学会編集の『月刊 国語教育研究』9月号特集「多様な教材を活用した『読むこと』の指導」では、甘楽裕貴「翻訳作品を使用した『読むこと』の指導—翻訳作品を読み比べて表現の違いを味わおう—」など、多様な文章表現に着目した具体的な指導例が提示されている。8月号特集「新しい時代に生きる語彙の学び」では、開田晃央「オンライン上の語彙資産を生かした単元構成」、北村卓也「ICT活用による学習者が言葉を実感する試み」など、ICTを駆使した新たな言葉の学習の提案がなされている。

2017(平成29)年改正の学習指導要領が小・中学校ですでに全面実施されており、2022年度からは高等学校において年次進行で実施される。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、表現の観点からのアプローチが不可欠である。

(中部学院大学)